

ラテンアメリカ都市物語

＝第11回＝

南米の真ん中、 アスンシオン市

田中 裕一

アスンシオン市は、日本よりも少々大きな国土を有するパラグアイ共和国の首都で、南米の中央に位置している。アルゼンチンのブエノスアイレス市、ペルーのリマ市、チリのサンティアゴ市等の周辺諸国の首都と比較すると規模も小さく知名度も低く、特にこれと言うような観光名所等も無い。しかしながらパラグアイ国内では随一の都市であり、政治経済文化の中心となっている。亜熱帯気候で暑い時期

が少々長いのが難点だが自然豊かな都市であり、十分な降水量と日射量があるため、街には樹木が生い茂り、花が一年中咲いていて緑と花に埋もれたような景観で、市内に在る小高い丘（ランバレの丘）から街を眺めるとまるで森のように見える。

パラグアイは、ブラジル、アルゼンチンという南米の両大国に挟まれ内陸国ということもあり、以前は経済的には後れをとり、筆者が移住して来た1990年当時、アスンシオン市は街中で馬や牛を見掛けるような牧歌的な都市で、多くの商店や事務所は長い昼休み（シエスタ）を取るのが当たり前、昼過ぎには街は閑散とし、正直「退屈な街」という印象であった。しかしながら、最近の経済成長は目を見張るものがあり、周辺地域を含めた都市圏人口は200万人を超え、近代的な活気溢れる都市へと急速に変貌を遂げつつある。（なお、行政区域としてのアスンシオン市は50万人程である。）



ラテンアメリカの中でのパラグアイの位置



パラグアイの中でのアスンシオン市の位置（グーグルマップより）



広々として緑豊かな市街地の景観（写真はすべて筆者撮影）

アスンシオン市の歩み

都市の位置は、地図をご覧いただければ分かる通り国の端に在り、アスンシオン市が面している大河パラグアイ川（南米第二の大河、ラプラタ河最大の支流、源流はパンタナル大湿原）、対岸はアルゼンチン領になっている。何故このような場所を首都にしたのか不思議に感じている方も多いと思い、このことを理解するために都市の成り立ちを振り返ってみる。

スペイン人が到来する前までの時代は、現在のアスンシオン市も先住民の世界であった。南米の広い範囲で活動していたトゥピー・グアラニ族の住む地域で、16世紀スペイン人がこのラプラタ地域に入り、奥地（現在のボリビア）の金銀財宝を求めて河を遡り次々に要塞を築いた。このような要塞の一つとしてアスンシオン市は日本では戦国時代の頃、1537年8月15日に設立された（このアスンシオン市創設の記念日は、パラグアイの始まりの日として現在でも特別な祝日とされ、大統領の就任もこの日に行われる）。その後、ボリビアへはリマからのルートが主流となってパラグアイ川のルートは顧みられなくなり、入植した人々は自活を余儀なくされる事態となった。このため現地の人との交流、そして一体化が進み、独特のグアラニ文化が生まれ、パラグアイ人としてのアイデンティティーを形成するに至った。



セントロ地区（中心部）学生達のバレードの様子

その後、他の多くの要塞は放棄され、アスンシオン市はスペイン統治下の時代、現在のアルゼンチン、ウルグアイを含むこのラプラタ河流域開拓の最初の中心地となった。市の正式名称「ヌストラ・セニョーラ・サンタ・マリア・デ・ラ・アスンシオン」（長い！ - 「聖母マリア様の昇天」という意味）と名付けら

れたこの都市は、この地域の中心として発展した。さらに、ここを拠点にして、サンタクルス市（ボリビア）、ブエノスアイレス市（アルゼンチン：一度消滅後の再構築）等の町が次々に開設されて行き、それ故にアスンシオン市は「都市の母」と称されている。この時代、アスンシオン市は現在のアルゼンチン、ウルグアイ、ボリビア西部等を含む地域（ラプラタ地域全体）の中核的な存在で、管轄する広大な大地の中央に堂々と君臨していたわけだ。このため現在でもアスンシオン市民は大いにプライドを持ち、南米諸都市の「本家」意識を持っているように見える。

日本が幕末明治維新の動乱の時代、南米においても大きな戦争があった。1865年、パラグアイは三国同盟（ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ）を相手に絶望的な戦争に突入した（この戦いは何か第二次世界大戦の日本と通じる部分があるようにも思える）。この時期までに富国強兵に励んでいたパラグアイは精鋭の陸軍を作り上げており、緒戦はブラジルを圧倒、しかしながら物量に勝り、また英国の経済力の支援を背景にする同盟軍に対して次第に劣勢となり苦戦を強いられ、1869年1月ブラジル軍はアスンシオン市を占領。それでもパラグアイは戦争を継続したが、遂に1870年フランシスコ・ソラーノ・ロペス大統領の戦死により降伏し、この結果イグアスの滝付近を含む広大な領土割譲を余儀なくされ、アスンシオン市の対岸までがアルゼンチン領となり、アスンシオン市は南米の小さな国の端に位置する首都となってしまった。なお、戦死したフランシスコ・ソラーノ・ロペス大統領は国の英雄としてマリスカル・ロペス（ロペス元帥の意）と称され、人々に敬愛されおり、市街地を貫くメインストリートの名称にもなっている。



セントロ地区 開催されたイベントの様子

三国戦争の後、数十年掛けてようやく復興した頃、日本では日中戦争が勃発した時期になるが、1932年にボリビアとの間で領土紛争、いわゆるチャコ戦争が勃発した。多大な犠牲を払いながらも有利な条件で講和したが、その後も政治は混迷し、クーデター、内乱が起き不安定な時代が続いた。政権が幾度も変わった後、1954年にクーデターにより政権を奪取したストロエスネル将軍は大統領となり、軍部を支配して独裁的な権力を手に入れた。1989年に縁戚関係にあるロドリゲス将軍のクーデターで国を追放されるまで、実に35年もの長期にわたりパラグアイを統治し、安定した一時代を築いた。治安は良かったが言論統制が行われ経済は低迷し、南米の中で取り残された国となってしまった。その後民主的な大統領選挙が行われるようになったが、国民の民主主義に対する経験不足もありクーデター騒ぎが起き、また周辺国の左傾化の波もあって左翼連合の大統領が誕生、そしてその大統領を弾劾するなどの混乱もあったものようやくこの10年、民度が上がり政治が安定し、それにともない経済も持続的な成長が続くようになり、現在アスンシオン市は大きな変貌を遂げつつある。

アスンシオン市の特徴

アスンシオン市はパラグアイ川が湾曲している場所の入り江を天然の良港として利用したことに始まる。内陸ではあるが港湾都市として発展し、アスンシオン市から河口のブエノスアイレス市まで直線距離で約1,000km、現在でも外国との物流は多くの場合、河川を利用している。ただ標高は海拔僅か43m、アスンシオン市からは滔々と流れるパラグアイ川を眺めることが出来る。この港付近に最初の市街地が出来、現在も大統領府、国会など主要な行政機関がありセントロ地区（中心部）と呼ばれている。その後都市は拡大を続け、現在市街地はこのセントロ地区から扇形に広がっている。その結果、セントロ地区が扇の要の位置、言い換えると都市圏の端に位置することとなり、大統領府や国会が在る地区は街の端となって川を挟み直線距離にして僅か約6kmでアルゼンチンとの国境となっている。

セントロ地区には伝統的な建物が多くあり、歴史を感じる魅力溢れる街並みとなっているが、道路は狭く駐車スペースなどが十分ではないので銀行等の金融機関や商業施設などは10km程離れた地区に移

転するケースが目立っている。新規のビル建設なども少なく居住人口は減り続け、セントロ地区の老朽化、空洞化が進んでいる。アスンシオン市は危機感を持ち、多くのイベントを開催する等魅力ある街づくりを目指し、住人を増やす努力を行い、セントロ地区の再活性化に取り組んでいる。これに呼応するように政府は港湾施設の跡地に総合庁舎を建設する計画を示すなど、セントロ地区の活性化を支援している。またセントロ地区の河岸は最近まで有効利用されておらず、一部はスラム化していたが2011年の建国200周年の際に改修が進み、公園が整備され、コスタネラと称する河岸道路が完成する等、景観が一変し、市民や観光客が訪れる名所となっている。



新名所として多くの人で賑わう河岸公園（コスタネラ）

セントロと空港の中間の場所に20年ほど前、大型ショッピングセンターが2つ開業し、これを中心に次々に商業施設や企業の事務所が移転して新市街地を形成している。この地区ではここ数年は続々と高層ビルが建設され、高層住宅や近代的なオフィスビルやホテルが建ち並んだ一大商業地域になりつつある。新市街地はお洒落なお店やレストランが多く在



急速に変貌を遂げている新市街地

り、セントロ地区とは対照的に毎日、特に週末は夜遅くまで賑わっている。そしてこれを取り囲むように閑静な住宅地が広がっている。

市民生活

アスンシオン市民は人種的には先住民族と白人との混血の人が多く、いわゆる「パラグアイ人」を形成している。一般的には小柄で少々太目、茶目気があり穏やかで親しみやすい人達で、多くは敬虔なカトリック教徒である。これに近年になってドイツなどの欧州、日本、韓国、台湾などのアジアからの新たな移住者が加わり多様な人種構成となっている。また、陸続きと言うこともあり、ブラジル人やアルゼンチン人等の近隣諸国の住民も多い。ただしアフリカ系の人は少なく、街で見掛けた場合でもブラジル人か米国人というケースがほとんどだ。一般的には真面目で単調な作業も黙々とこなすが、時間があると友人達とマテ茶を回し飲みしながらおしゃべりに夢中になっている。そしてアサードと呼ばれる焼肉料理が好物でパーティー好き、週末になると市内至る所で深夜まで、時には明け方まで親戚や友人達が集まり、大音響の音楽をかけて、多くの市民がビールとアサードで楽しんでいる。サッカーが大好きで草サッカーを楽しんでいる光景をよく目にする、またプロ一部リーグの多くのチームはアスンシオン市内に本拠地を構えており、人気チーム同士の一戦となると大いに盛り上がる。

言語に関してはアスンシオン市内ではほぼスペイン語が使われており、スペイン語と共に公用語とされている先住民族由来のグアラニ語は庶民の日常会話や地方出身者の間で使われている。なお、英語はホテルや一部商店など限られた場所で利用出来るだけで、一般市民はほとんど理解出来ないのが実情であり、国際化にはまだまだ時間が掛かりそうだ。街の治安はよく保たれており、普通に生活し危ない行動や危険な場所に立ち入らない限り安心して暮すことが出来、多分ラテンアメリカの首都の中ではトップグループに入ると思われる。

問題点としては、インフラ整備、特に道路そして公共交通機関の整備の後れが挙げられる。市内の公共交通機関は民間のバスだけで、年々交通渋滞も激しくなり非常に不便な状態になっている。政府は打開策としてアスンシオン都市圏の幹線となっている国道1号線の中央部にバス専用レーンを建設する計

画を立て、郊外からアスンシオン市との市境まで着手したが、工事はトラブル続きで住民の不満も高まり、現在のところアスンシオン市内では工事が手付かずの状況となっている。例え完成しても、これにより改善が果たせるのか疑問視されている。将来的には抜本的な解決策としてモノレールやライトレールの等の交通システムを導入する必要があるのかも知れない。

日本との関わり

暮らしていて人種差別を感じることはほとんど無く、むしろ超が付くほど親日的であり、日本人、日系人と判ると信用が増すことが多々ある。日本からの旅行客は、観光地が多い周辺諸国の大都市と比較すると少ないようだが、アスンシオン市内には100室以上有する「ホテル内山田」の他、幾つか日本人が経営する民宿がある。居心地が良いのか「長期滞在者」が多いようで、中には数か月滞在する方も居るようだ。また、パラグアイには約1万人の日本人・日系人が暮らしており、アスンシオン市にも数千人規模の日系コミュニティがある。日本人会、各都道府県人会、商工会議所などを組織し、日本食品店、和食のレストランもある。各団体は色々なイベントを開催し地元の人との交流を深め、特に毎年10月には「日本祭」と称する盆踊りを中心としたイベントが開催され、地元のテレビ、新聞等に取り上げられるなど大いに盛り上がる。



毎年10月に開催される日本祭

またアスンシオン市のメリットとして挙げられるのは、南米のほぼ中央に位置していることだ。市街地から空港までのアクセスも良く、南米の主要都市に飛行機を使うと2時間程度で行くことが出来る。

日本の企業が南米進出の際に拠点として考えるのはブラジルのサンパウロ市、アルゼンチンのブエノスアイレス市等だが、法人設立の手続き等が簡単で進出企業への優遇処置もあり、査証も取り易く税金も安い、その上日本語を話せる医師が多く、日本人学校など教育機関も充実しており家族と安心して暮らすことが出来る等、アスンシオン市は南米統括の拠点として最適地であると考えます。魅力溢れ、発展を続けているアスンシオン市に、より多くの方が関心を持ち訪問されることを期待しています。

(たなか ゆういち ラ・ルラル保険株式会社取締役、
元在パラグアイ日本商工会議所会頭)

ラテンアメリカ参考図書案内



『タンゴ 歴史とバンドネオン【新装版】』

へのみつ
舩松 伸男 東方出版 2018年6月 234頁 2,400円+税 ISBN978-4-86249-334-7

大阪で内科医院を開業する医師にして、バンドネオン奏者としてタンゴ楽団リーダーを務めた著者（1930～2018年）が、アルゼンチンタンゴの前史、起源と語源、ミロンガからタンゴへの変化、タンゴがフランス等欧州で認められアルゼンチンでも認知されるに至った歴史を、これまでのタンゴ史研究の積み重ねを踏まえて詳述している第Ⅰ部と、タンゴのリズムの根幹を奏するバンドネオンには、日本とコンチネンタルタンゴで常用されているクロマティコとアルゼンチンの本場で用いられていて著者の得意とするディアトロニコという、外観は同じだが演奏法はまったく異なる二つのタイプがあるとして、その違い、誕生と発達、自身のバンドネオンとの出会い、日本の奏者のパイオニアたち、ディアトロニコの魅力を述べた第Ⅱ部から成る。

タンゴの発祥と発祥の地が、ブエノスアイレスの港町ボカで下層階層と娼婦の間から生まれたという俗説を検証し、欧州でのタンゴの評価とバンドネオンの2つのタイプの関わり、タンゴの完成した形式はコンチネンタルタンゴといえるが、それがアルゼンチンでディアトロニコが用いられたのに対して、欧州そして両タイプの差違を理解しなかった日本においてはアコーディオンと共通性があるクロマティコが一般的になってしまった経緯を詳述している。著者のアルゼンチンタンゴとバンドネオン・ディアトロニコへの熱く深い愛情を感じさせる、1991年初版の貴重な解説書の新装版。

(桜井 敏浩)